

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月30日現在

機関番号：16301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720309

研究課題名（和文） 担い手のライフヒストリーからみた琉球織物継承の地域メカニズム

研究課題名（英文） The local mechanism of the Ryukyu textiles succession seen in terms of life history

研究代表者

井口 梓（IGUCHI AZUSA）

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号：50552098

研究成果の概要（和文）：

個々の織子の生産活動やライフヒストリーの分析を通して、読谷山花織、および八重山ミンサーを継承する地域メカニズムは、それぞれの地域を象徴する地域文化として、沖縄を代表する伝統的工芸品として、また本土復帰、若夏国体、沖縄海洋博覧会、海邦国体など本土観光客が増加するという外的なインパクトに柔軟に対応した「沖縄らしさ」を象徴する土産品として、織物の価値を高めることにあり、様々な商品開発やPRのための事業、組合組織を強化する事業を展開してきたことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

The local mechanism which inherits the Yomitan textiles and the Yaeyama textiles suited raising value as a traditional handicraft representing Okinawa as a souvenir article which symbolizes "Okinawa-likeness" as local culture which symbolizes each area.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：地域文化、ライフヒストリー、担い手、琉球織物、沖縄県

1. 研究開始当初の背景

本研究の主たる対象とする沖縄県の伝統工芸は、第1に地場産業という側面、第2にコミュニティ、伝統、歴史と密接に関わる地域文化としての側面、第3に地域の観光資源としての側面がある。これまでの既往の研究として、第1の伝統的地場産業の継承に関わる従来の研究は過去に研究蓄積が多くみられる。しかし、それらの研究の多くは空間的分業あるいは行程的分業の視点から生産システムの解明を主眼としたものであった。ま

た、第2の視点はこれまで農業・農村地理学の分野において、農家による農閑期の副業という視点から考察されてきており、関連する論文は枚挙に暇がない。申請者がこれまでに実施した予備調査によれば、沖縄県における琉球織物を含む伝統工芸は、1972年の本土復帰から急速に進展した観光化との関連が深いことが予察的に示されている。第3で挙げた観光化との関わりから考察する必要性がここにある。

2. 研究の目的

本研究は、担い手の行動パターンや意思決定に着目して伝統工芸の生産が維持継承される地域のメカニズムを解明することを目的とする。本研究では、沖縄県の主に農村地域で継承されてきた琉球織物のなかで、「読谷山花織」と「八重山ミンサー」を事例として、一時は衰退した織物技術の復興プロセスに着目し、織物生産の担い手である女性への詳細な聞き取り調査に基づくライフストーリーの分析から解明する。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するための主たる研究方法は、織子のライフストーリーの収集およびその分析である。分析の視点は、以下に図示した3つの要素（(1) 政治的・(2) 経済的・(3) 社会的要素）と担い手（織子）との関わりを検討し、地域文化を継承していく地域のメカニズムについて明らかにする。初年度には、まず沖縄県における織物産地の現在の動向、技術の復興、普及について概観した上で、読谷山花織と八重山ミンサーの生産地を研究対象地域とする（図1）。

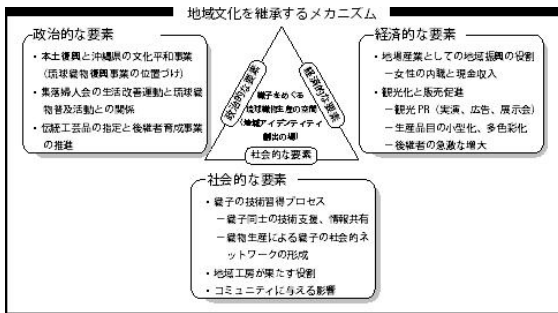


図1. 研究の枠組み

4. 研究成果

本研究の成果は、以下の通りである。

- (1) 沖縄県における琉球織物の動向
琉球織物は、貢納布制度による管理体制のもとで産地独自の織技術や技法が確立され

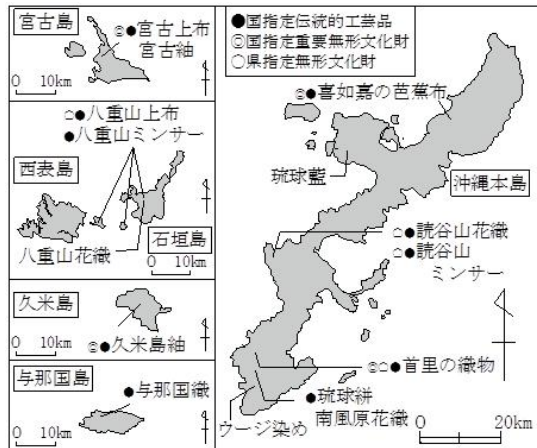


図2. 琉球織物産地の分布

た。沖縄県統計書の織物産出額によると、1890年には島尻産地、宮古産地、八重山産地を含む8か所の産地で合計418、937反が生産されており、明治期から昭和戦前期まで家内工業として、あるいは農村地域における女性の農閑副業として発展してきた。しかし、第2次世界大戦の戦火によって、受け継がれてきた数々の織物や図案は焼失し、各産地では多くの織り手を失ったことで技術の継承も困難な状況にあった。現在の琉球織物産地の多くは、本土復帰直前の1960年代に各自治体や婦人会、地元の女性たちが中心となって復興されたものである。

沖縄県には、沖縄本島（大宜味村、本部町、読谷村、那覇市、豊見城市）、南風原町、久米島、宮古島、与那国島、八重山諸島など多くの織物産地がある（図2）。国指定伝統的工芸品の指定を受けた織物は10品目、沖縄県指定伝統的工芸品の指定は21品目にわたり、その多くは女性従事者によって生産されている。

図3に、沖縄県における主要織物産地の生産額の推移を示した。1972年の本土復帰による沖縄文化への注目や、1975年の沖縄海洋博覧会を背景とした「沖縄ブーム」を経て、琉球織物の生産額は著しく上昇してきた。琉球絣を生産する南風原町は、戦前から京阪神の呉服問屋に絣の反物を卸す大規模産地であった。戦後の停滞期を経て1970年代から再び需要が高まり、1975年には従事者数が700人まで増加した。150の織元（事業所）では、分業体制により絣が量産され、生産額は14億円に達した。

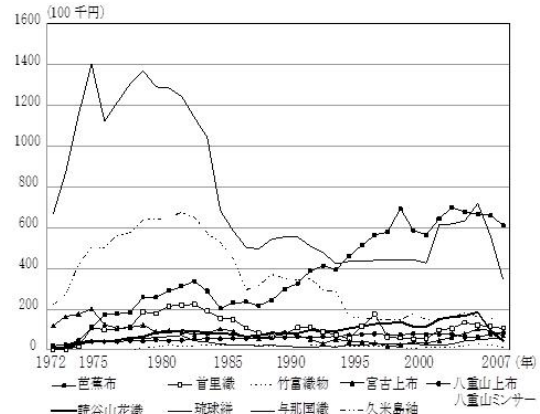


図3. 琉球織物の生産の推移

上記のような琉球絣産地や宮古上布、芭蕉布の一部を除き、多くの産地では、それぞれの従事者の裁量によって生産する。織物工房と称する個人の事業所であっても、賃労働関係はほとんどなく、織賃は出来高払いをとることが多い。琉球絣や宮古上布では、図案、絣括り、染色、織をそれぞれ分業しているが、芭蕉布や首里織、久米島紬などは染色植物の収集から染色、製織まで1人の生産者による

一貫生産である。女性従事者たちは、家事や育児と両立しながら自身のペースで織物を生産している。

沖縄ブームを経た 1980 年代以降、琉球織物への需要は下がり、生産額は急激に減少した。この時期から八重山産地では、土産品が主力製品になり始めた。産地内では、ミンサー帯を生産する 2 つの企業が 1970 年代後半から小物製品の開発を始め、かりゆしウェアやハンドバック、財布などを積極的に販売してきた。1980 年代後半には、石垣島を訪れる観光客の増加に伴い土産品生産は急成長を遂げ、現在ではこれら企業が八重山産地の 70～80% の生産額を占めている。また、同時期から各産地に熟練した技術をもつ個人作家があらわれ、産地を支える重要な役割を果たすようになった。主に展示会で活躍する彼らは、個人名による織物の買い付けが中心であり、1 反に数千万円の値段がつくこともある。2000 年から 2005 年までは、このような展示会での販売状況によって、産地の生産額が大きく推移するという現象が見受けられるようになった。

以下では、読谷村における読谷山花織と石垣市、竹富町における八重山ミンサーを事例に検討する。

(2) 読谷村における「読谷山花織」

1) 読谷山花織の復興

沖縄県中頭郡読谷村は、沖縄県の中部に位置する人口 37,306 人(2007 年)の村である。読谷山花織は、村の農漁家における副業として受け継がれてきた。多くの家では、女性のみが従事する家内工業であったため生産量が少なく、読谷村は極めて小規模な織物産地であり、明治初期からその生産が衰退し始めた。沖縄県内の織物産地が地場産業として確立した大正期には織子も減少し、1890 年頃にはその技術継承も途絶えた。読谷村において、読谷山花織の復興が始まったのは 1964 年以降である。読谷村では、本土復帰にむけて、農村の地域資源を活かした地場産業の発展が地域振興策として掲げられ、軍用地で働く女性が在宅で従事できる内職として、読谷山花織の復興が選ばれた。

この読谷村の読谷山花織復興事業に大きな役割を果たしたのは婦人会組織である。読谷村婦人会は、工芸学校で織物技術を学んだ与那嶺貞氏らに花織技術の復元を依頼した。与那嶺氏らは、南風原町の織物技術や地元高齢者の証言、残存する花織裂地をもとに、1964 年に技術を復元した。婦人会は、各集落の婦人会役員に技術勉強会への参加を呼び掛けた。当時の勉強会では、織機 1 台に 10 人の女性が交代で座り、花織に触れ、楽しみながら織るものであった。そのため、仕事を辞めて花織生産に携わる女性は少なかった

ようである。しかし、講習会のうわさが村内に広まり多くの女性たちが読谷山花織に興味を示すようになると、1969 年から読谷村が窓口となって 4 か月間の技術指導講習会が開始された。

1976 年に読谷山花織事業協同組合(以下、花織組合)が設立されてからは、国と沖縄県の事業補助を受けた後継者育成事業が開始された。この後継者育成事業の成果もあり、1972 年に 50 人だった織子の数は 1990 年に 257 人になり、産地の規模は急激に拡大した。一方で、若い織子たちは、基本の技術習得で終了し生産しないなど、後継者の定着率は徐々に低下していった。そのため花織組合では、募集面接を厳しくし、講習期間を延長して内容を充足するなど、織子育成を強化した。

花織組合による糸の購入と染色、共同販売以外は、一人の織子が一貫して生産している。読谷村には、楚辺(1984 年設立)、座喜味(1985 年設立)、波平(1987 年設立)の 3 集落に読谷村立花織工房がある。織子は、技術講習終了後にいずれかの工房に所属する。生産場所として、織子は自宅か工房を選択することができる。若い世代ほど、子育てをしながら生産するため、在宅生産を選択する。在宅生産の織子であっても、工房の維持管理や清掃を交代でおこなうほか、技術支援が必要な際には熟練した技術をもつ織子の指導を受けに工房へ行く。この地域工房は、技術習熟度の異なる織子の織技術を支援する重要な場所であると同時に、世代の異なる織子たちが交流し合えるコミュニティスペースとしての役割も果たしている。

2) 読谷山花織の地域振興と商品化

1975 年の沖縄海洋博覧会による観光客の増加、土産品拡大のインパクトは、量的な側面として生産量の増加のみならず、読谷山花織産地の質的な変化をもたらした。読谷村にとって、当時の課題は後継者の獲得であり、花織組合は後継者によって安定した職業となるように産業化を志向し、生産基盤の拡充、花織製品の販路の拡大を模索した。1976 年度の振興計画・実施計画では、産地基盤の強化を図るために必要なこととして後継者の育成、技術・技法の改善向上、原材料の安定的確保、需要の開拓、作業環境の改善、織子の福利厚生増進、消費者への情報の提供などが掲げられた。これら産地形成の要となる項目は 2001 年度まで継続して実施された。

1978 年までの組合員数を検討すると、後継者育成事業が開始された 1972 年当時の 50 人から約 2.8 倍の 140 人まで急激に増加している。この新規参入者の増加は、観光業の好景気による土産物需要の増加と相まっており、収入面において花織生産の職業的価値を向上させたことが分かる。後継者育成事業は 1976 年の花織組合設立当初から展開され、技

術習得の初心者カリキュラムを整備することで、織子の基礎技術の習得に効果が表れ、生産の増大につながった。これら花織組合による積極的な製品開発が、織子にとって読谷山花織の商品化を強く意識させる契機となった。

以上のように、花織組合は後継者の育成、技術の向上、販路の開拓、生産システムの管理などの機能を果たし、多様化する市場動向に柔軟に対応しつつ産地を形成し、維持してきた。この前提として、花織組合は、個々に自立経営を行う各織子に対して、産地の意向や製品の動向について意識させ、組織として花織組合の存在を認識させる必要性があった。特に花織の技術の習得は単に講習のみで得られるものではなく、各工房での先輩織子を中心とした女性同士の交流の中で技術が磨かれ向上が図られている。この点で、各工房を結びつける花織組合の存在は重要な役割を果たしており、結束を強めるために、忘年会、染色材料の集団採取、各工房単位でのイベント実施などレクリエーションにも力を注いできた。花織組合が織子同士の円滑な交流を支えることで、花織産地の社会的基盤の形成につながり、織技術の定着へとつながった。

3) 織子A氏(90歳代)のライフストーリーにみる読谷山花織の重要性

A氏は、1935年に尋常高等小学校を卒業後、青年学校で和洋裁と織技術を学んだ。結婚後は、嫁ぎ先の養豚業を手伝いながら子供3人を育てていた。A氏が子育てをしていた頃、読谷村婦人会では、女性向けの内職として花織技術を伝える勉強会が始まった。しかし、当時の花織は、内職とはいえ技術の勉強会であったため、収入が得られなかった。生活のために働かなければならなかったA氏は、子育てと養豚業に従事し、勉強会には参加しなかった。

A氏は40歳代になり子育てがひと段落した頃から、雑貨商店を開業した。A氏は店番台の横に機を置き、空き時間になると青年学校で習った織物を織っていた。織物を織り続けるうちに、A氏はかつて織子になりたかったことを思い出し、商店を辞めて1961年に織物講習会に申し込んだ。講習会は、公民館や空き家、民家を間借りして行われていた。粗末な空き家では、A氏らはビニールシートで雨漏りを防ぎながら講習を続け、約2か月で帯、手巾(ティーサージ)、手花(ティーバナ)など基本技術を習得した。

技術習得後のA氏は、座喜味集落の自宅敷地内に個人工房を開業し、講習会に年齢制限で参加できない40歳以上の女性を集めて、花織技術を教えた。12人の織子たちに基本技術を無償で指導しながら、A氏はミンサー帯と手巾を生産し、那覇市の販売店まで売りに

出かけた。その帰り道、A氏は収入額の半分で次の織物のための糸を購入し、残りは技術指導のために工房の維持費にあてた。

1976年に花織組合が設立された後は、A氏は販売を組合に任せ、自宅での技術指導と並行して、組合からの受注生産を始めた。通産省が読谷村へ視察に訪れた時には、自宅工房を開放して織子たちと製織のデモンストラーションをおこない、地域工房設立の必要性を訴えた。1985年に座喜味花織工房が設立された後は、指導していた織子たちは工房へ移ったが、A氏は工房でも後継者の指導を続けた。1980年代後半から、織子の定着率が急激に下がった時に、A氏は若い織子たちに「もうけがあると思っははいけない」「一度織るのを辞めたら戻れない」と助言し、読谷山花織に携わること自体に誇りをもつよう励ました。A氏に技術を教わった織子たちは、現在は花織工房で熟練技術者として生産し、若い世代を支援している。A氏は、古い技術を守りながらも、若い織子たちが織る明るい色や大柄の模様を見て参考にしており、世代を超えた交流を重視するA氏にとって、花織は単なる技術ではなく、時代を超えて受け継ぐ読谷村の地域文化そのものである。

(3) 担い手のライフストーリーからみた八重山ミンサーの変容

第2次世界大戦以降、八重山諸島のミンサー生産は、竹富島において数名の技術保持者が存在するのみであった。1958年に外村吉之介ら民芸運動の支援を受け、竹富島で技術復興のためのミンサー織りの講習会が実施され、島内の技術保有者が徐々に増加した。本土復帰後は、竹富島における観光化と民芸ブームが相まってミンサーの需要が伸び、女性たちは民宿経営の傍ら、土産品としてミンサー帯を生産した。一方で、技術が途絶えていた石垣島では、竹富島出身のA氏がミンサー織りの技術を学び、1971年にミンサー生産と加工、販売を手掛けるA社を設立した。1989年に八重山諸島のミンサーは「八重山ミンサー」として体系化され、国指定伝統的工芸品に指定された。

近年、いずれの琉球染織産地も反物や帯地生産で厳しい状況にある中で、「八重山ミンサー」の特徴はミンサー生地を用いた小物商品の開発によって急成長した点である。石垣島に立地するA社を含む3企業が、1970年代からハンドバックや財布・名刺入れ、かりゆしウェアなど商品開発を進め、現在では「八重山ミンサー」の総生産額のうち80%以上を占める。八重山諸島を訪れる観光客の増加に伴って土産品の需要は拡大し、販売される小物商品は多岐にわたる。観光客にとって、「八重山ミンサー」は伝統的な帯地よりも小物加工品のイメージが定着している。

1) A氏のライフストーリーにみる「八重山

ミンサー」の特徴

八重山ミンサーに対するファッション性の追求 1926年に竹富島で生まれたA氏は、3歳の時に家族で台湾へ渡った。1946年(20歳)まで過ごした基隆市では高等女学校に通い、洋裁や和裁を学んだ。幼少期を都市部で過ごしたA氏は、20歳で竹富島に戻って結婚した後も農作業が不得手であり、その代わりに義母が織り技術を教えた。1948年に夫の転勤で石垣島へ転居したA氏は、長女を出産後に女学校で習った洋裁技術を活かして、洋装品の加工を内職として始めた。洋装加工の依頼が増えたことで、A氏は1955年に東京高等技芸学院に半年間留学し、同年に石垣島でA洋裁店を開業した。ワンピースやスーツなど女性用のオーダーメイドの洋装品は石垣島では珍しく、A氏は洋装に合うアクセサリ、バックなど装飾品や化粧品も販売するようになり、時にはファッションショーを開催するなどA洋裁店は石垣島における女性ファッションの発信場所となった。竹富島の義母や親戚の依頼を受け、A氏はミンサー帯を洋裁店で販売するようになると、細帯だけではなく現代の洋装に合うハンドバックや日常生活に用いる財布など2次加工品の開発に関心が高まった。1971年にA社を設立したA氏は、竹富島で織り技術を再度習い、財布やバックに加工して販売した。小物品としての「八重山ミンサー」は、A氏のライフヒストリーと新しい女性ファッションに対する意識の強さが契機となっていることが分かった。

2) 象徴としての五と四の緋柄—地域文化としての「八重山ミンサー」—

A氏は、全てのミンサー商品に五と四の緋柄を解説するしおりを添付した。5つと4つの四角によって構成される花緋は、女性が男性に対して「いつ(五)の世(四)までも末長い互いの愛情」を意味するものとされる。この解釈の起源は諸説あるが、「八重山ミンサー」を体系化し、この言説を強く印象付けたのはA社の影響が大きい。A社は事業を展開する中で、染と織の工程を分業化した。100名の織子は賃機として、自宅で生産している。現在の八重山諸島のミンサーは、生産の中心が石垣島に移り、その生産形態は著しく変化した。A氏は「竹富島で古くから生産されていた」織物としてのルーツを強く意識しており、加工品では五と四の緋柄を前面に出すことで、現代的な洋装に加工しつつも「歴史ある染織」としての伝統性を主張している。この緋柄は極めてシンプルな形状であり、現在では島内の様々な施設で地域文化を象徴するデザインとして多用されている。A社は石垣島を代表する企業として成長し、近年ではミンサーにまつわる歴史や社史を記録しつつある。これらの記録によって、A氏およ

びその家族の歴史と八重山諸島の歩みが重なり、地域文化としての「八重山ミンサー」を形作っていることが明らかとなった。

(5) 結論

読谷山花織は、技術、技法の伝承が途絶えていたにも関わらず、伝統工芸の復興運動が起こった背景には、読谷山花織が地域資源を活かすことができる産業であった点に加え、第2次世界大戦以降に集落を離れ基地関連業務に従事する女性らが、農村地域の伝統文化を受け継ぐことで、読谷村の女性らが戦前まで送ってきた農村での生活スタイルを取り戻す意味もあった。

一方、八重山ミンサーの商品化は沖縄海洋博以降のいわゆる沖縄ブーム、民芸ブームが契機となった。また、本土復帰、若夏国体、沖縄海洋博覧会、海邦国体など本土観光客が増加するという外的なインパクトや市場動向や顧客のニーズに柔軟に対応しつつ、伝統的な技術を保持した上で、新しい製品開発も積極的に行った。八重山ミンサーのもつエキゾチックな色柄は、本土からの観光客にとって「沖縄らしい」土産物として強く認識されている。また、花織組合は、安定的な高収入を得るためにデパート等での催事や観光施設などでの実演、体験活動を積極的に展開し、呉服市場での継続した顧客を獲得していった。とくに、土産物のための小物加工品の開発は、八重山諸島における観光開発と相まって急激に成長した。洋装品への2次加工を通して、デザイン性を高めてきたことは、地域にとって伝統工芸品の位置づけを変化させる重要な契機であった。

個々の織子の生産活動やライフヒストリーをみると、それぞれが異なった価値観を持ち、生産に対する意識も異なっていることが分かる。しかし、個々の織子の表現は異なるが、伝統的な農村文化を受け継ぐ意識や読谷村を代表する文化の後継者として次世代へと受け継ぐ自覚が共通してみられた。また、生産体制を維持するために、組合が重視してきた織子同士の連携を強める各事業は、地域工房を織子同士の社会的な結節点として意識させていった。その結果、若い織子にとって地域工房での世代を超えた交流は、衰退しつつあった婦人会活動や失われつつあった農村コミュニティの代替的な役割を果たすようになった。読谷山花織、および八重山ミンサーを継承する地域のメカニズムは、それぞれの地域を象徴する地域文化として、沖縄を代表する伝統的工芸品として、また「沖縄らしさ」を象徴する土産物として、読谷山花織の価値を高めることにあり、様々な商品開発やPRのための事業、組合組織を強化する事業を展開してきた。

縮や緋、藍染めなど、日本の農村地域に立

地する産地の多くが、織物に日本の農村的な「なつかしき」や「日本的ふるさと」を表現しているとすれば、読谷山花織の表象する農村性は必ずしも「日本的ふるさと」とは一致しない。先述したように、八重山ミンサーは観光化を背景に観光客のまなざしを意識した商品化や観光施設でのデモンストレーションを開催し、艶やかな原色を多用した東南アジアの織物文化に通ずる「エキゾチック性」や、「農村」で「女性」が受け継ぐ「地場産業」という共通のアイデンティティを強化してきた。これは沖縄の民芸品に共通する傾向である。

一方で、特筆すべき点は、これら読谷山織物はもうひとつの「ふるさと」を併せ持っている点である。ライフヒストリーの調査では、近年の織子にIターン者やUターン者が増えつつあることが分かった。彼らは、非農家であり、都市住民である。彼らにとって、集落組織や祭事、コミュニティ活動や婦人会活動は日常生活で全く触れることの無い「農村らしい」生活そのものである。若い彼らの技術習得の過程に、集落出身の先輩織子が関わることで、織り技術と合わせて集落活動のルールや地域の歴史など、農村的な社会慣習が受け継がれるようになった。若い世代は、経験したことの無い農村生活を通して読谷村を知り、再解釈することで、「読谷山らしい」織物を生産しようと試行錯誤している。復興から現在に至るまで、琉球織物は、本土復帰や観光など経済的・社会的変化の影響を受けながら、アジア的な「ふるさと」とそれぞれの織子が読谷村に対して抱く「ふるさと」を併せ持つ織物として変化してきた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 井口 梓、地域づくりと風土をめぐるツーリズムの可能性－白保集落の事例、調査研究情報誌 ECPR、査読なし、31-2、2013、3-8
- ② 井口 梓、伊予の歴史－職人としての織子たちの姿－、文化愛媛、査読無し、66、2011、28-31

[学会発表] (計14件)

- ① 井口 梓、田舎暮らしの変遷とその特徴、日本地理学会秋季学術大会、2012年10月6日、神戸大学
- ② 井口 梓、これからの観光とまちづくりを考える、三好市観光協会総会(招待講演)、2012年6月22日、三好市文化センターサナート
- ③ 井口 梓、美しい景観と村づくり、愛媛県地域課題解決型創出支援事業畑野川花夢の里づくり事業講演会(招待講演)、2012

- 年5月23日、久万高原町立畑野川小学校
 - ④ 井口 梓、八重山諸島における農村移住と観光、日本観光研究学会分科会、2012年01月22日 富山まちなか研究室
 - ⑤ 井口 梓、風土を知り・風土を伝える－地元学を地域に活かす、愛媛県教育委員会「ふるさとえひめ学」(招待講演)、2011年12月10日、伊予市中央公民館
 - ⑥ 井口 梓、これからの観光とまちづくりを考える、JTB協定旅館ホテル連盟 四国地区合同宿泊増売連絡会議(招待講演)、2011年11月29日、松山市大和屋
 - ⑦ 井口 梓、観光まちづくり・風土をめぐるツーリズム、中国経済産業局・第4回地域づくり連携サミット(招待講演)、2011年11月25日、庄原市市民会館
 - ⑧ 井口 梓、風土をめぐるツーリズム－観光まちづくりによる地域振興－、宇和島経済研究会、2011年7月20日、宇和島市宇和島第一ホテル
 - ⑨ 井口 梓、担い手のライフヒストリーからみる「八重山ミンサー」の変容－石垣市におけるA氏と家族のライフヒストリーを事例に－、日本地理学会秋季学術大会、2011年9月23日、大分大学
 - ⑩ 井口 梓、観光まちづくりの視点、道後温泉旅館組合総会(招待講演)、2011年6月22日、松山市大和屋
 - ⑪ 井口 梓、ライフヒストリーからみた地域文化の維持・継承－琉球織物を事例に－、内子町文化講座、2011年6月17日、内子町自治センター
 - ⑫ 井口 梓、沖縄の観光化と琉球織物の継承－読谷山花織を事例に－、日本地理学会春季学術大会観光地域研究グループ、2011年3月30日、明治大学
 - ⑬ 井口 梓、今なぜ観光まちづくりに取り組むのか、松山市・坂の上の雲のまち松山観光まちづくりシンポジウム(招待講演)、2011年2月14日、松山市大和屋
 - ⑭ 井口 梓、農村の地域文化はみんなで守る－沖縄琉球織物から見えるもの－、農林水産省農山漁村活力再生支援事業・都市と農村の未来を考えるセミナー(招待講演)、2010年11月3日、広島市落合東福祉センター
- [図書] (計1件)
- ① 井口 梓、農林統計出版会、沖縄の読谷山花織による地域振興、田林明編「商品化する日本の農村空間」、2013、315-338

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井口 梓 (IGUCHI AZUSA)
愛媛大学・法文学部・准教授
研究者番号：50552098